

## 〈パネルディスカッション〉 司会：フィリップ・ヴァネ（獨協大学名誉教授）

### 「生きることへの愛、カミュと同時代の三人」

#### 【要旨】

アンドレ・ブルトン（ソフィー・バステイアン）、ジャン・ポール・サルトル（根本昭英）、ルネ・シャール（フランク・プラネイユ）、（司会：フィリップ・ヴァネ）

このシンポジウムを他の作家や詩人、そして他の地平へと広げることを願って、4人のパネラーが、単独でそして同時に他のパネラーとの対話の形で、カミュの同時代人であり、生涯の一時期に強いかかわりをもった三人、アンドレ・ブルトン、ジャン・ポール・サルトル、ルネ・シャールの生涯と作品に関連する諸局面を検討し、「生きることへの愛」のテーマの多様な意味について考察する。

#### 【プロフィール】

●根本昭英（ねぎ・あきひで）…東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程を経て、パリ第4大学大学院フランス文学・比較文学研究科博士課程修了。博士（文学）。現在、獨協大学外国語学部フランス語学科専任講師。専門はジャン・



ポール・サルトルを中心とする20世紀フランス文学・思想。博士論文では、「ポエジー」の概念に着目し、ジュネ、マラルメ、フローベールら他作家をめぐるサルトルの伝記的批評から、彼の潜在的な美学—倫理体系を再構築するべく試みた。おもな論文・著書に『L'art comme «anthropodécie」 : la moralité de la création artistique chez J.-P. Sartre』 *Études sartriennes*, n.° 17—18' Éditions Ousia' 2015 & Jean-Paul Sartre : la Poésie de l'Échec, Édition Universitaire de Dijon (近刊) など。

●フィリップ・ヴァネ…獨協大学名誉教授。1975年から日本に在住。カミュのジャーナリズム活動や政治的著作の研究を続けている。プレイヤッド版『カミュ全集』（2006年、2008年）の編集、『アルベル・カミュ事典』（ジャンニヴ・ゲラン編、ラフォン社、2009年）、『アルベル・カミュ、カイエ・エルヌ』（2013年）に協力した。

2010年、日本における最初の国際カミュ学会を組織した。いくつかの国際的な学会に参加し、最近のものとしては2018年ルールマラ地中海会議、2019年ミノルカ島のアルベル・カミュ地中海学会がある。ミナル社社の『ルヴュ・デ・レットル・モデルス』カミュ・シリーズの編集者、日本カミュ研究会の『カミュ研究』の編集委員である。

